

千葉繁の半生：『造化機論』の翻訳に至るまで

赤 川 学

1 はじめに

明治8（1875）年に刊行された『造化機論』は本邦初の本格的な性科学の書であり、欧米性科学の知が本格的に近代日本に移植されたマイルストーンともなっている。その翻訳者である千葉繁の来歴は謎に包まれていたが、赤川（2013）によってそのいくばくかが解明された。簡単にまとめると千葉繁（通名・欽哉）は、天保5（1834）年、浜松井上藩の藩医であった千葉忠詮（胤邑）の次男として生まれた。安政6～8（1859～61）年頃、父の死に伴い、浜松藩に出仕。自らも藩医として第10代当主・井上正直に仕えた。明治2（1869）年、版籍奉還に伴う浜松・井上藩の転封につきしたが、下総国鶴舞の地を踏んだ。2年後、廃藩置県に伴い鶴舞藩は消滅。繁は明治5（1872）年4月、神奈川県庁に勤務する。明治8（1875）年10月、3年で退職するのとはほぼ同時に『造化機論』を出版し、翌年以降、一般読者向けに書き直した『通俗造化機論』『通俗造化機論二篇』『通俗造化機論三篇』の三部作がベストセラーとなった。

本稿では、浜松井上藩に関する基本史料である「井上家文書」（京都大学文学部博物館古文書室蔵）や、幕末から明治初期にかけての医学史的事実をもとに、千葉繁が『造化機論』を出版するに至った過程とその後を素描する。千葉繁の半生を描くことを通して、幕末から明治期にかけてのセクシュアリティ言説が、文化的な交流を通して構築される一端を明らかにしたい。

2 井上家文書における千葉繁

井上家文書で千葉欽哉（あるいは繁）の文字を最初に確認できるのは、慶応元（1865）年の『諸向御届』である。これは井上家の藩屋敷における種々の行事、儀礼、訪問者、金銭授受などの出来事が事務的に記録された文書である。12月17日、藩主・井上正直⁽¹⁾が金百疋を下した人物の一人として、「小菅純清殿、千葉欽哉殿、横山龍達殿、…」という並びで登場する。のちにみるように小菅純清や横山龍達は井上家の藩医である。繁もまた藩医の一人として、年末に褒美（いわばボーナス）を受け取った。

さらに慶応4（1868）年の『諸向御届』3月16日によれば、千葉欽哉の妻（数え26歳）と息子・富三郎（数え4歳）が、浜松藩の127人とともに江戸から浦賀を通過し、浜松に向かっていく⁽²⁾。ときは戊辰戦争の終盤、西郷隆盛と勝海舟によって江戸城無血開城の決定が下された直後である。内戦と戦乱の予感に震える江戸を離れ、母国浜松に向かったと思われる。ただしこの船に繁は同乗していない。繁は江戸の藩屋敷で藩医としての職務をこなしていたのであろうか。

激動の幕末を経験した浜松・井上藩は、元号が慶応から明治に変更される直前の9月5日、上総国への転封を命じられる。明治2（1869）年1月27日、正直は家臣団とともに浜松城に別れをつげた。一行は2月2日に東京着、そこで一週間ほど過ごしたあと、11日に上総国埴生郡長南矢貫村の仮本営・今関勘四郎宅に到着している。

井上正直は6月19日、鶴舞藩知事に任命され、7月17日、任地である鶴舞に赴いた。石高は6.9万石。すぐさま鶴舞藩庁（現在の鶴舞小学校がある場所）の近辺に藩校・克明館、藩士住居、城下町などの設置をはじめた。明治3（1870）年4月、藩庁や知事邸宅が完成し、正直と藩士たちも鶴舞に移り住んだ（市原市教育委員会編 1982）。鶴舞に移住した藩士たちの世帯数は「七百かまど」といわれ、人数にして1,201人（男性572、女性629人）とされている。家族・係累を含めると3,000人近くが大量に移動したことになる（小幡編 1966）。36歳になる千葉繁とその妻子も、その中の一世帯であった。

3 小菅純清との出会い

鶴舞に到着してからの千葉繁は、どのような日々を過ごしたのだろうか。『明治二巳年 寓殿目録 自十月八日 至十二月』⁽³⁾ 10月15日に、千葉欽哉の名前が再び登場する。

「一

小菅純清

千葉欽哉

右御家従江 命候条可申達旨振武隊司令官ヨリ名代湯川文養江達有之候旨純清ヨリ吹聴有之」

千葉欽哉（繁）は小菅純清とともに井上正直の邸宅を訪れ、鶴舞藩の軍隊である振武隊の司令官から、（おそらく小菅と千葉の）「名代」である湯川文養にお達しがあったことを伝えに来た。それがどんな内容のお達しだったかは定かでない。しかし名前の記載順から、小菅純清が繁の、役職上の上司であったことは確認できよう。9日後の10月24日、藩主から小菅と千葉に対して、命令以来、よく勤務してきたとして、内々に「金五百疋」が下された。その御礼を二人が伝えに来た⁽⁴⁾。また12月18日には小菅と欽哉に「一両壺分」が下賜されている⁽⁵⁾。更に年末の12月28日に欽哉は、「名代」湯川文養、小菅純清、賀古公斎、横山龍達とともに、藩主とそに屠蘇を献上している⁽⁶⁾⁽⁷⁾。

連名で登場するこの5人が、鶴舞藩の藩医であることは間違いない。それにしても彼らはどのような人物だったのか。

まずは賀古公斎。彼は浜松藩に種痘の苗を伝授し⁽⁸⁾、「疱瘡医者」と呼ばれた、幕末の浜松井上藩のなかでも著名な人物である。文政2（1819）年、大阪で生まれ、14歳で父を亡くし、篠崎小竹に入門。20歳で江戸に出て、昌平黌に長く勤めた儒学者・古賀侗庵の久敬塾や、長州藩の藩医・蘭医にして、緒方洪庵の師匠である坪井信道に学んだ。23歳で長崎に遊学し蘭医書

の翻訳などを行い、27歳のときに大坂で医業を開始する。嘉永4（1851）年、江戸に向かう途中で浜松に足をとどめ、この地の人となった。しばらくは民間で医業を営み、嘉永5（1852）年の冬から翌年春にかけて、大坂適塾の緒方洪庵から取り寄せた痘苗で種痘を試みた。安政6（1859）年、異国人が掛塚浜に上陸した際、飯島義幸とともにオランダ語で応接したことをきっかけに同年11月、浜松藩に召し抱えられた（土屋1973, pp.216-218）。ちなみに公斎の息子は賀古鶴所。森鷗外の終生の親友で、『キタ・セクスアリス』に登場する「古賀鶴介」のモデルとして知られた人物である。公斎は浜松井上藩における種痘の導入に功績を残したが、鶴舞移転後はその実質的担当者の地位を小菅純清や千葉繁に譲ったように思われる。

次に小菅純清。医学史家の深瀬泰旦によると、安政4（1857）年5月、江戸の蘭方医・伊東玄朴、戸塚静海、箕作阮甫らが幕府に提出した種痘所発起の願書、ならびに翌年設置されたお玉ヶ池種痘所（のち西洋医学所、医学所）に設立資金を拠出した83名のなかに「小菅純盛」という人物がいる。この人物は緒方洪庵の「勤仕向日記」に登場する小菅純清と同一人物であることが判明している（深瀬 2002, p.59）。同じ日記の文久2（1862）年8月15日付では小菅純清が、洪庵が主催した会議に医学所の一人として出席し、4人の子どもの種痘を施したという記録が残っている（緒方 1963, p.393）。

小菅純清については医学史上でも、これ以上のことは不明であった。しかし彼が浜松井上藩の藩医であったことは明らかであり、井上家文書にも何回か登場する。最初に確認できるのは『諸向御届』の弘化4（1847）年11月7日付であり、純清は「井上英之助家来医師 小菅純清」として登場する。元治元（1864）年4月12日の『諸向御届』では、この頃老中職にあった井上河内守正直が上京するにあたり、「手医師」小菅純清を連れていった経緯が書かれている。これによると純清は、かねてより「種痘所御用中」であったが、正直が江戸に帰るまでその職を解き、正直に同行することを要請された。ちなみに正直は文久2（1862）年、当時医学所頭取であった緒方洪庵と数度にわたり顔を合わせている⁽⁹⁾。正直と洪庵とのつながりによって小菅が医学所に派遣された可能性がある。

また明治3（1870）年4月12日の『鶴舞藩庁記録』にも「医員 小菅純清」として登場する。それによると純清は種痘館で種痘の免許を取得したので、種痘を受けたい有志の者は小菅まで申し出るよう藩内に通達がなされた⁽¹⁰⁾。6月には種痘所が開設され、藩士や一般人にも種痘が実施された（市原市教育委員会編、1982, p.109）。このように小菅は、鶴舞藩の種痘責任者というべき立場にあった。千葉欽哉が井上家文書に登場する際もほとんど小菅と連名であり、明治2（1869）年12月28日の『寓殿目録』では「泰寿院様 御前様ニ御薬差上ニ付薬種料被下候旨達之」という記録が残っている。泰寿院とは藩主・正直のことである（久保田 1980）。小菅と千葉は正直に対して薬を用いた治療を行ない、その対価として薬種料を受け取ったわけであり、井上正直の藩医として、堅実な働きをしていたようにみえる。少なくとも小菅が千葉の上司として、何らかの知的影響を与えたことは想像に難くない。

4 種痘への参画

さらに鶴舞藩での種痘の実施状況をみてみよう。『寓殿目録』によれば、明治3（1870）年8月14日から16日にかけて、小菅純清は東京に出張し⁽¹¹⁾、9月3日には大学東校（医学所の後継、東京大学医学部の前身）を訪れている⁽¹²⁾。この時期の大学東校といえば、イギリス医学のウィリスが去り、後任となるドイツ医学のミュルレル、ホフマンが未だ着任していない時期にあたる。西洋医学の導入という観点からは、一種のエアポケットのような時期である。しかし明治3（1870）年は種痘医にとって苦難の年であった。この年春頃から天然痘が全国的に流行しはじめる。4月24日、新政府は大学東校に種痘館を設置するとともに、次のような太政官達を全国の藩に布達して牛痘を普及させようとした（深瀬 2002, p.293）。おそらく小菅は、この種痘館を訪ねたのであろう。

種痘の儀ハ済生ノ良法ニ候処僻陋之地ニ至テハ今以不相行向モ有之趣ニ付府藩県末末迄行届様厚ク世話可致候事（厚生省医務局篇 1976, p.233）

鶴舞藩の種痘に、藩医たちはどのように関わったのか。6月に種痘所が開設された際、藩内の医員に対してなるだけ出席するようにとのお達しが出ている（千葉県史編纂審議会, 1968, p.402）。この頃、鶴舞藩から扶持米を支給されていた医師は7名であった（ibid, p. 413）。前年末、藩主・井上正直に屠蘇を献上している千葉繁も、この中のひとりとして種痘に関わったのではなかろうか。

7月23日には種痘所に関して以下のような布告が出ている。

「○七月廿三日種痘所員鑑定診察方以下ノ諸官ハ医員一同ニテ負担スベキ旨振武隊司令官於テ相達スベキ旨同官エ相達ス其文ニ曰ク

種痘所官員

鑑定診察方

種痘方

採漿方

右諸官所掌之職務医員一同ニテ兼帶被命之候条可被申達候事」

医員のうち何名かを種痘所の官員として割り当てろという命令が、振武隊司令官から出た。振武隊司令官は種痘所の設置に関わる担当職である。前年10月15日、小菅純清と千葉繁が正直のもとにやってきて、振武隊司令官から名代・湯川文養に下された命令の内容を伝達しにきたことをすでにみたが、これは種痘に関連する話題だった可能性が高い。ちなみに鶴舞藩の職制では「種痘所掛」が1名、種痘所附属が3名となっている。「種痘所掛」には当時、振武隊伍長でもあった細野起が任命されていた（『鶴舞藩庁記録』明治3年11月24日）。したがって7人

の医員のうち、3人が種痘所附属となったと考えられる。

千葉繁がこの3人のうちの1人であったことを確証する史料はない。あえて不利な要素を探すなら、緒方洪庵と深い関係をもち、蘭学系の知識を蓄えた賀古公斎や小菅純清と、もともとは本所の町医者から藩医に取り立てられた父・忠詮の跡をつぎ、幕末の時点で英学志向だった⁽¹³⁾ 千葉繁との間には、知的系譜の相違がなかったわけではない。しかしここまでみてきたような小菅純清との深い職務上の関係を鑑みれば、繁が小菅の部下として種痘の実務や運営に関わった可能性はきわめて高い。

ところが鶴舞藩での千葉繁の言動は、明治3（1870）年の8月28日を最後に確認できなくなる。この日の『寓殿目録』に、次のような記録がある。

「一 千葉欽哉
右鶴舞賜邸江今日引移罷候之旨届申聞候」

繁は、鶴舞のどこかに藩主から邸宅が与えられ、転居した。先にみたように、前年末には湯川文養、小菅純清、千葉欽哉、賀古公斎、横山龍龍の藩医5人が連名で井上正直に屠蘇を献上していた。ところがこの年末、他の藩医は昨年同様に屠蘇を献上しているにもかかわらず、千葉欽哉の名前だけがそこにはない。

このことは、明治3年8月に鶴舞の賜邸に転居してから、藩主・井上正直と藩医・千葉繁との関係が徐々に薄れたことを意味するのではないか。少なくとも井上正直を診断したり、薬を処方するような業務からは遠ざかったように思われる。そしてこの年末までに、繁は鶴舞藩を離れたのではないか。

廃藩置県にともない鶴舞藩も明治4（1871）年7月14日に鶴舞県となり、1か月後の8月13日には、藩知事・井上正直はその職を解かれる。鶴舞藩は解散し、藩士たちは藩主の庇護なき世界で、「自助」の世界を生きなければならなくなった。元鶴舞藩士のなかには新たに鶴舞県に雇用された人もいたが、千葉繁はその中に含まれていない。

ここでいったん、千葉繁の足取りは途絶えてしまう。

5 千葉繁、横浜に現れ、監獄医となる

千葉繁が次に姿を現したのは、明治5（1872）年の横浜だった。4月30日、神奈川県庁に「十四等出仕」として就職している。この頃、横浜－品川間で鉄道の仮営業が開始されている（横浜開港資料館 2010, p.118）。

千葉は神奈川県庁のどこで、どのような仕事に従事したのだろうか。幕末には神奈川奉行所であった神奈川県庁内で事務を執ったのか。それとも文明開化に沸き立つ外国人居留地や税関などにいたのか。

実は千葉繁は、監獄にいた。

当時の神奈川県庁には、内庁として庶務課、租税課、聴訴課、出納課、外庁として庶務課、文書課、條約未済国課、邏卒課が存在した（横浜市 1963, p.23）。『神奈川県官員録』（横浜郷土研究会編, 1997, 明治5年のもの）によると、千葉欽哉は「邏卒課」に所属している。「邏卒」とは巡査、警察官のことである。

これまでの経緯を振り返ってみると、これは意外な事実である。幕末までには英学に通曉し、浜松・鶴舞藩では藩医・種痘医として勤務していた千葉繁が、おもむろに警察官になったとは考えづらいからだ。

しかしこの謎は、ひとつの決定的な史料によって氷解する。『横浜市医師会史』（栗原 1941）がそれである。横浜医師会に所属する浅水十明は、明治初年の横浜医学界の状況を次のように追憶している。

其の後日に月に土地の発展に随ひ医師の数も多くなり、明治四年頃、芳山彦克、千葉欽哉の両氏が官邊の囑託医（今の警察醫監獄醫）となり有名でありました。此の両氏は其の後今の野毛山平沼氏邸宅の邊に設立しありし邏卒病院（後ち巡査病院と改む）に勤めておりました。（ibid, p. 6）。

「明治四年」というのは、明治5年の間違いであろうが、ここに登場する「芳山彦克」もやはり邏卒課に属し、さきの『官員録』でも「十五等出仕」として千葉繁の隣に名前があるので、千葉繁の部下であろう。二人は「相棒」として、診察や治療を行ったと考えられる。その場所は横浜・戸部村にあった監獄、すなわち戸部牢屋敷以外には考えられない。

戸部牢屋敷は安政6（1859）年、下田の閉港に伴って、戸部村官崎村に設置された。もともとは神奈川奉行の支配に属していた。明治維新後、刑部省から内務省へと所管が移行し、明治5年5月以降、邏卒課に属していた（肥塚, 1909）。千葉繁が神奈川県庁に就職した直後である。

戸部牢屋敷は、現在の公務員伊勢山町舎（横浜市西区伊勢町3丁目）、通称、暗闇坂と呼ばれる丘のうえに存在した。入獄者の数は徐々に増加し、明治6（1873）年には、獄舎一坪につき10人以上の入獄者が存在した。ひどい混雑ぶりであり、衛生状態もよかったとはいえない。ちなみに明治8（1875）年に繁が居住していた「横浜伊勢山町四十五番地」は、神奈川奉行所や神奈川県庁が置かれていた紅葉坂（現在の横浜県立図書館、横浜市西区紅葉ヶ丘9-2）の北側にある官舎の一つであり、戸部の監獄までおよそ400～500mほどの距離である。繁は神奈川県庁に務めていた3年間、紅葉坂の官舎から暗闇坂まで通い、受刑者や在監者の検診や治療、監獄の衛生管理などに携わったのである。

浅水十明の回想によると、千葉繁は「野毛山平沼氏邸宅」すなわち現在の野毛山住宅亀甲積擁壁⁽¹⁴⁾に存在した「邏卒病院」に勤務していた。邏卒病院とは明治5（1872）年2月20日、野毛町200番官舎に仮設置された巡査対象の病院であるが、のちに患者が増えたため、同199番地を分院にして、明治9年に老松町一丁目の官舎の棟に移動した（明治15年7月廃止）。勤務時間は朝9時から午後3時まで。患者を診察し、薬を調合し、処方箋を書くことを業務とした

という（神奈川県立図書館 1969, 肥塚1909）。

してみると千葉繁が神奈川県庁に雇用された理由は、医者としての経歴を買われたからと解釈できる。戸部監獄の暗闇坂移転にあたり監獄医として雇用され、次いで邏卒病院に兼務したというわけだ。

繁には、父・千葉忠詮から on the job training で継承した臨床の実践と、井上家の藩医・種痘医として得た薬種に関する知識があった。しかし戸部監獄では、畑違いの業務に従事することになったであろう。というのも監獄医としては、在監者の健康に全般的に配慮したり、天然痘やコレラなどの院内感染を防ぐなど、より全般的・包括的な医学知が必要になるからだ。さらに邏卒病院では、警察官の怪我や病氣全般に関わる治療を行ったはずで、これらの業務は繁にとって新しいチャレンジだったと思われる。当時、横浜では医者数が絶対的に不足していた。しかしそんな場所で繁は、横浜医学界の人びとの記憶に残るほどには「有名」な人物となっていた。

6 千葉繁、シモンズと出会う

さらに浅水十明の追憶に戻ろう。明治7（1874）年、太田町6丁目に県立の横浜病院が設立され、米国医師「セメンス」が外来・入院の治療を開始した。この「横浜病院」とはのちの十全病院（現在の横浜市立大学医学部の前身）、「セメンス」とは横浜医学の父というべきシモンズ（Duane B. Simmons, 1834-1889）のことである。明治4（1871）年、丸善書店の創業者である早矢仕有^{はやし ゆでき}が、横浜に病院が一つもないことを嘆き、元弁天に仮病院（市中公立仮病院）を設立・開業した。しかしその後、火事で消失。この事態に、一般の人々からも本病院設立の声が高まったことを受け、神奈川権令・大江卓は明治5（1872）年7月、シモンズを月給320円で雇用し、太田町6丁目（のち相生町6丁目と改称）に移転し、横浜病院を設立した。明治6（1873）年12月には、野毛山語学所修文館が移転した跡地（現在の老松小学校）に移り、横浜病院ないし横浜医院と呼ばれ、明治7（1874）年2月に十全病院と改称した（横浜市役所 1932, 横浜開港資料館 2010）。

横浜病院は病院独自の規則をもち、貧民施療の布達を行い、医員以下の部署を分けた（横浜市役所 1932）。シモンズが招聘されたとき、治療の全権が彼に与えられ、千葉鐵蔵、古谷野好、内藤三郎等が助手として治療事務に従事した（肥塚 1909, p.270, 神奈川県医師会編 1977, p.49）。

ここに登場する「千葉鐵蔵」は『神奈川県史料・第5巻』所収の市立公立病院関係文書では「病院掛 十一等出仕 千葉鐵蔵」として記載されている（神奈川県立図書館 1969, p.373）。当時、神奈川県庁に千葉姓を有する人物は1人しかいないので、これは千葉繁のことである。また明治5（1872）年10月に制定された「横浜病院規則」の中にも、「病院係」として千葉繁の名前が確認される（横浜開港資料館 2011, p.19）。

「病院掛兼」という肩書きから、繁が邏卒病院と同時に、横浜病院にも兼務していたことが伺える。そしてこの病院で、繁はシモンズと邂逅した。シモンズと神奈川県令との契約書には

「病院のことについては病院医務掛りと相談の上決める」という規定が存在していた（小玉1997, p.80）。千葉繁はシモンズの助手を務めつつ、病院の運営や経営に関して、ともに相談するパートナーだったはずである。ちなみに小玉順三の推計によると、シモンズは1834年生まれ。千葉繁と同年の生まれである。2人が出会った明治5（1872）年、二人は38歳。繁にとってシモンズは、同年代の友人であると同時に、英米医学の師匠として尊敬する存在でもあったはずだ。シモンズは日曜日を除いて毎日3時間勤務し、明治5年9月から翌年8月まで、十全病院の1ヶ月の平均入院患者は26人、外来患者数は256人だったとされている（神奈川県立図書館1969, p.375）。驚異的な人数の患者を、シモンズと繁を含む数名の日本人医師とで担当していたことになる。

7 千葉繁と D. B. シモンズのかかわり

千葉繁がシモンズのもとで過ごした数年間は、医者としてのキャリアや臨床経験に大きな影響を与えたに違いない。ここでシモンズの生涯について、千葉繁との関わりがありそうな範囲で考察してみたい。

シモンズが初来日したのは、安政6（1859）年11月1日のことである。S. R. ブラウン、G. F. フルベッキとともに、オランダ改革派教会（カルヴァン派）の派遣宣教師として、同年5月7日にニューヨークを出港した。同船したブラウンは文久2（1862）年に横浜英学校教師、明治2（1869）年に修文館教師となり、明治6（1873）以降は自宅にブラウン塾を開設した。これがのちに明治学院大学となる。フルベッキは来日後、長崎に向かい、幕府の英語学校として設立された済美館や、佐賀藩が作った致遠館の校長に招かれた。ここには大隈重信、副島種臣、伊藤博文ら明治の政治家が集った。フルベッキも明治2（1869）年以降、新政府の顧問、大学南校の教師・教頭、元老院の法典翻訳などに従事し、政治、外交、教育の多方面に大きな影響を残した。

シモンズは来日した翌年には宣教師を辞職し、文久2（1862）年頃には横浜の82番地（現中区山下町）で医業を営んだ⁽¹⁵⁾。その後いったん欧米に出国し、明治2（1869）年の再来日時には横浜居留地38番地、宣教師にして医師ヘボン（James Curtis Hepburn）の邸宅の隣地に居を構えている。その後、明治3（1870）年に、設立間もない大学東校のお雇い教師として採用されたという説がある⁽¹⁶⁾。

明治3（1870）年以降も、シモンズはヘボンとともに白内障、虹彩炎の後遺症、乳癌など9例の手術を行い、福澤諭吉の腸チフスを快癒させている。明治5（1872）年3月には神奈川県令・陸奥宗光宛に、現在の伝染予防法にあたる「防疫法」の制定を求める建白書、5月には「売薬取締り」の建議書を提出し、医療政策・衛生政策上の陳情や要請を積極的に行なっている。

十全病院に勤務してからも、シモンズの活躍は止まらない。千葉繁と関わりそうな活動としては、まずは人体解剖がある。

シモンズは明治6（1873）年6月、脚気病患者の病理解剖を行なっている。その模様を伝え

る7月2日の『横浜毎日新聞』「脚気病者解剖説」という記事では、「横浜大田六丁目 市中病院執事」なる人物が、6月26日に行われた解剖の様子を伝えている。それによると6月に脚気に罹り、入院を乞う者が7～8名いた。そのうち「邏卒某なるもの劇症に罹り百治功を奏せず遂に泉下の客となれる。於此解観せんことを親戚に議り、其兄云く、維新開化の際に当り愚夫愚婦と雖も有益報国に意なきもの殆ど鮮し、況や我弟とや。生きて卑官と辱するも死て世人の亀鑑となり数千人の疾苦を救ひ万人の裨益とならば屍寸断せらるるとも敢て辞せざる処なりと。教師セメンス氏以下満堂の子弟欣躍に堪えず、速に解剖す」と（荒井 2004, p.100）。

脚気で亡くなった警察官の死体解剖の許可を親族から得て、医学的情熱に燃えて早速解剖に取り組むシモンズと医員の姿が描かれている。ここに登場する邏卒（巡査）は十全病院に来る前には邏卒病院で診察を受けた可能性が高い。してみれば、当時邏卒病院に勤務し、十全病院の医員でもあった千葉繁と芳山彦克が、この重篤な患者を十全病院に導き、病理解剖の労をとったと想定できよう。ことによると、この文章を執筆した「市中病院執事」その人が千葉繁である可能性もある。だとすれば、この署名記事は、繁が自らの言葉で書き記したことが現時点で唯一、確認される文章ということになる！（¹⁷）

また千葉繁がより対等な形でシモンズと関わり得た分野としては、種痘の実施、種痘所の運営も考えられる。

横浜では安政年間から、すでに種痘は不完全な形ながらも行われていた（横浜市役所, 1932, p.872）。明治3（1870）年11月、横浜に悪性の天然痘が流行し、子どもが多数亡くなった。このときお雇い医師のニュートンの監督のもと、当時医師だった早矢仕有のと、のちに横浜共立病院院長となる松山不苦庵（¹⁸）の二人が、横浜吉原会所に出張して、生後75日以後の小児に種痘を実施した。これが横浜種痘所の始まりである。明治4（1871）年9月には、元弁天武術講習所を横浜町仮種痘所として種痘を実施し、翌年の火災による焼失後は、のちに横浜医学所発起人となる浅岡林斎の自宅に移行した。

シモンズの建言により、十全病院に種痘の事務や実施体制が移り、十全病院が種痘本局となったのは明治7（1874）年7月のことである。当時再び天然痘が流行しており、十全病院内に附属病舎を新設し、種痘を奨励し、種痘済の者にはその証明書（種痘証）を発行した。明治10（1877）年には各大区に種痘医を1～3名配置し、十全病院は神奈川県下の種痘を統括する責任を担った（荒井 2004, pp.122-124）。

千葉繁は、浜松藩医の賀古公斎と小菅純清から得た種痘の技術をすでに備えていた。横浜の地でもシモンズと協働しつつ、種痘医としての技術を発揮した可能性は高い。

さらにこの時期、千葉繁はシモンズとの交流を続けるなかで、医学書の翻訳業務に従事するようになっていた。明治8（1875）年12月に版權免許を得た、シモンズの講義録『診筵雜記』の冒頭では、翻訳者の江馬春熙（臣巳）が次のように記している。

余横浜十全病院ニ在テ亜国ノ教師「セメンス」氏ニ親灸シ千葉宮島長島今井宇治田等ノ諸氏ト其ノ診筵ニ列シ共ニ患者ノ施療ヲ扶クルヲ得タリ

ここに登場する「千葉」はいうまでもなく千葉繁のことであり、他のメンバーとともにシモンズの業績を世に残そうとしたことになる。

8 千葉繁、“*The Book of Nature*”を翻訳する

再び『診筈雑記』の冒頭に立ち戻る。ここで千葉繁の名前が登場していることには、二つの歴史的な意義がある。

まずは千葉繁の十全病院における交友関係が伝わってくる。翻訳にたずさわった「千葉宮島長島今井宇治田」とあるうち、「宮島」は、この書の出版人でもある宮島義信のことである。越後出身で、1860年に横浜に来てイギリス海軍医ニュートンの指導を受け、併せてシモンズの薫陶を受けた。明治12（1879）年、野毛病院の創設者である近藤良薫とともに横浜医学講習所の代表となる。このとき千葉繁も発起人の一人として名を連ねている（栗原 1941, p. 4）。宮島自身はすでに明治5（1872）年秋にシモンズの『梅毒小箒』の翻訳にも関わっており、のちに性病科医院を開設したという。

「長島」は当時十全病院の当直医で、のちに横浜医学講習所の発起人となる長島條吾のことである。十全病院は横浜における近代医療の最前線というべき場所であり、全国からシモンズに学ぼうと多士済々のメンバーが集っていた。千葉繁もそれらの人物と交流を重ねていた。

第二に、シモンズの『診筈雑記』とジェームス・アストンの『造化機論』の出版はほぼ同時期である。おそらく明治8（1875）年頃、千葉繁は、シモンズの著書と『造化機論』の原著である“*The Book of Nature*”の翻訳を同時並行的に行なったはずである。ここから、繁が“*The Book of Nature*”の存在を知り、その翻訳を手がけるようになった経緯としては、2つの可能性が考えられる。まずは、シモンズから直接から教えてもらったか、シモンズの蔵書のなかに“*The Book of Nature*”を見出した可能性がある。次に、十全病院や横浜でシモンズと関わりをもつ日本人医学者たちとの交流、具体的には江馬春熙、宮島義信、長島條吾、近藤良薫、松山棟庵、早矢仕有的らとの交流のなかから、“*The Book of Nature*”や、のちに翻訳することになる『通俗造化機論』（二篇・三篇）の原著である Edward Bliss Foote の“*Plain Home Talk*”の存在を知った可能性もあるだろう。これ以外の可能性は、さしあたり無視してよいのではないか。これらの人物の経歴や蔵書を調べていけば、さらに正確な入手ルートを特定できる可能性もある。

いずれにせよ千葉繁にとって、十全病院でのパートナーであり、アメリカ医学の師でもあったシモンズの著作と、ジェームス・アストンがアメリカで出版した“*The Book of Nature*”は、病院勤務に謀殺される傍ら、翻訳に値すると考えるほどの重みをもった書物であったと考えられる。逆にいえば、のちに『造化機論』に浴びせかけられた非難のように、本書の出版が単なる興味本位や売らんかなの商業主義だったとは考えづらい。事実『造化機論』の刊行時、繁は出版人として、本名も、居住地も、嘘偽りなく明らかにしている。この姿勢は『通俗造化機論』（二篇・三篇）の刊行時にも揺らいでいない。

千葉が、文明開化のセクソロジーを、誰に恥じることなく、堂々と世に問うたことは間違いないだろう。ここまでの千葉繁が『造化機論』の出版に至る経緯である。

9 千葉繁と早矢仕有的

明治20（1887）年3月31日の『通俗造化機論』三種類の合本（再販）では、千葉繁の住所は「神奈川県横浜区野毛町四丁目三百五十二番地」となっている（斎藤 2006, p.6）。この頃までは、出版人である山東直砥や出版書肆の稲田屋佐兵衛と連絡を保っていた。山東は明治初頭に北門社（北門義塾）という私塾を開設し、明治4（1871）年から神奈川県参事を務めた人物でもある。この奥付からは、千葉繁が少なくとも明治12年以降20年まで住所を変えず、存命であったことが確認できる（このとき52～3歳）。ちなみに明治20（1887）年6月19日の『東京日日新聞』では、稲田屋佐兵衛が『通俗造化機論』の広告を掲載しており、次のようにいう。「此書世界に名を轟きたるものにして凡天地間に生あるもの、司たる人間社会一大緊要なる男女交合の利害人類種子繁殖懷妊の論其他種々の論説実地婦人の歎を帯自然に恍惚たるに至り而して生子強壯造化の秘事至妙なり都て人間社会最も闕くべからざるの良書と云ん既に販売数万部の高に至る」とある。「既に販売数万部」とは、現在でもちょっとしたベストセラー並みの売れ行きである。多少の誇張はあるかもしれないが、相当数の部数が刷られ、市井の人びとに読まれたことは間違いない。

ところで千葉繁が終の住処としたかもしれない「野毛町四丁目三百五十二番地」は、十全病院があった場所の至近距離にある。明治8（1875）年に「雇」に転じて、神奈川県庁との関係が希薄になってからは（赤川 2013）、シモンズが率いる十全病院の近くに住み、横浜医学の歩みとともにあったといってよいだろう。

ちなみに繁は丸善書店の創業者・早矢仕有的とも知り合いだった。早矢仕は明治3（1870）年、横浜境町一丁目に静々舎診察所を開設するが、この場所には中島桑太、近藤良薫、伊東某、武田等の人物が集まり、診察に当たった（早矢仕編 2003a）。この静々舎は早矢仕の書店（丸善）と薬店と軒を連ねていたが、ここに集う医療関係者の中に千葉繁がいた。「早矢仕有的年譜」（早矢仕編 2003b）には次のような記述がある。

千葉繁斎（造化機論ノ訳者但実ハ山東直砥氏ノ訳ナリトモ云ハル又十全病院トカヘモ出勤）⁽¹⁹⁾

ここで早矢仕は、「実ハ山東直砥氏ノ訳ナリトモ云ハル」と記しているが、これは信用できない。たしかに山東は北門社という英語塾を開設するほど英語の知識は豊富だった。しかし医学的知識に関しては素人である。山東が医学書を翻訳する必要性はないし、出版に際して繁に「名義貸し」のようなことを依頼する必然性も見当たらない。そもそも明治4（1871）年以降、神奈川県参事となって多忙を極め、その後実業界に転じた山東と、幕末から藩医・種痘医として活躍し英語にも通曉していた千葉繁の、どちらが『造化機論』や『通俗造化機論』三部作の

翻訳に適していたかと問うならば、答えは明らかだろう。山東直砥が『造化機論』の真の訳者であるという説は衝撃的ではあるのだが、おそらくこれは、山東が『通俗造化機論』三部作の出版人として名前が出ていることから生じた、流言飛語の類と思われる。

ちなみに「早矢仕有的年譜」の明治9（1876）年の項目に、次のような記載がある。

九年野毛山千葉繁斎氏ノ隣屋敷ニアリタル三ツ井銀行員某ノ私営ニカカル石鹼製造所ヲ引受ケ
横浜書店ヨリ水谷義知ヲ転シテ其掛トシ製造ヲ継承ス

千葉繁が住む野毛山の邸宅（「野毛町四丁目三百五十二番地」）の隣には、三井銀行員が経営する石鹼工場があったが、その人が退出した後を早矢仕が買取り、受け継いだという。千葉繁と早矢仕有年（丸善書店）は、間接的ながら neighbours の関係にあったことになる。いうまでもなく繁は丸善書店に足繁く立ち寄ったことだろう。その洋書コーナーで、英米の医学知に対する憧憬と知識欲を掻き立てていた姿が目につく。

こうして千葉繁は、幕末から明治初期にかけての横浜医学、すなわち福沢諭吉ら慶応義塾系の人々が導入せんとした、英米医学の人脈に連なるのである。

註

- （1） 井上正直は、天保8年10月29日（1837年11月26日）に生まれ、弘化4（1847）年に父正春の逝去後、弱冠20歳で藩主となった。千葉繁の3歳年下にあたる。その後正直は奏者番、寺社奉行を勤め、文久2（1862）年10月9日から元治元（1864）年7月12日、慶応元（1865）年11月26日から慶応3（1867）年6月17日までの2度にわたり、老中の地位にあった。千葉繁が最初に史料に登場した慶応元（1865）年12月、正直は二度目の老中についたばかりであった。
- （2） 石井（1981）に掲載されている「鶴舞藩士族准士族籍」（1870年3月15日）には、次のような記載がある。

「明治二己巳年十月一日ヨリ

一、高五十俵

巳十月十三日ヨリ

一、知事殿家従医員

千葉欽哉

午ノ三十七歳

妻 里

午ノ二十七歳

伴 富太郎

午ノ八歳

二女 徳

午ノ三歳

メ四人」

千葉繁の妻の名は「里」である。伴（長男）の名前は富太郎となっている。5歳年下には「徳」という長女がおり、4人家族であった。繁はここで「知事殿家従医員」とされ、井上正直の藩医であったことが確認される。

- （3） 井上家文書、京都大学文学部図書館蔵。
- （4） 『明治二己巳年 寓殿目録 自十月八日 至十二月』10月24日（井上家文書、京都大学文学部図書館蔵）
「一 金五百疋宛

小菅純清

千葉欽哉

右今般御家從江

命以来出精可相勤依而不表立被

下之御礼申聞即申上」

- (5) 『明治二巳年 寓殿目録 自十月八日 至十二月』12月28日(井上家文書、京都大学文学部図書館蔵)

「一

小菅純清

同一両壺分ツ

千葉欽哉

右厚以思召被下之候旨吹聴有之」

- (6) 『明治二巳年 寓殿目録 自十月八日 至十二月』12月18日(井上家文書、京都大学文学部図書館蔵)「一

湯川文養

小菅純清

屠蘇 一貼宛

千葉欽哉

賀古公斎

横山龍達

右例年之通献上有之即申上候

但昨年迄者出来之間ヨリ差出御用人ヨリ相呉候以当年より江直当席ヨリ差出し」

- (7) 横山龍達については明治3(1870)年の11月10日付の『鶴舞藩庁記録』(井上家文書、京都大学文学部図書館蔵)に「右種痘所繁用人聞ニ付同所出席ノ医員申談可相勤旨被仰付之候様吹聴申聞候」という記載があり、種痘所に勤務する医員であったことが確認される。

- (8) 緒方洪庵『癸中年中日次之記』嘉永六年二月十一日による(緒方1963)。

- (9) 『勤仕向日記』文久2(1862)年10月9日、11月9日、10日、28日(緒方1963)。

「

医員

小菅純清

右今般從種痘館同術免許有之候ニ付テハ一藩中並御支配所中末々迄種痘施術可致旨相達置候間、有志之者ハ同人エ可申出御事

右ノ趣一藩中並御支配所中エ布告可被有之候事

午四月十二日 大参事」

- (11) 「明治三年八月十六日 雪

一

小菅純清

右東京御用向相相済一昨十四日彼地出是昨夜深更ニ及到着候間各旨為御届罷出被由申聞候」

- (12) 「明治三年九月三日

一

小菅純清

右大学東校ヨリ御用之儀有之候条急速出府可致旨御達書到来ニ付出府可致旨余殿ヨリ被相達之尤発足日限之儀者可及達候聞其上ニ而発足可致旨是亦御同人ヨリ被相達候段届申聞之」

- (13) 明治期の六大教育家の一人とされる近藤真琴(1831 - 1886)が文久3(1863)年に開設した私塾・攻玉社が、明治5(1872)年に東京府に提出した「私学開業願」のなかに、木更津県貴族の田中貫一という英学教員がいた。攻玉社の教員名簿には次の記載がある。

慶應三丁卯年三月ヨリ英学千葉欽哉え從学 明治二巳巳年ヨリ明治三庚午年迄箕作秋坪え從学 翌年ヨリ圓山俊輔え從学 同年九月ヨリ当塾え入塾 英学算術修行罷在 且英学教授罷在候(攻玉社学園, 1986, p.368)。

木更津県貴族ということは、田中貫一は鶴舞藩士であり、慶応3(1867)年3月の時点では、浜松藩士の子弟だったはずである。ちなみに浜松井上藩の分限帳「從四位井上河内守家臣名簿」(小幡編1979)には、田中姓を持つ者は10人存在するので(下の名前は醒、庸義、泰稠、寿庸、伝次、誠富、忠道、判米、茂市、善次郎)、この中の誰かの親族と考えられる。貫一は慶応年間

の終わりから明治3年にかけて、英学を学ぶため、箕作秋坪などの洋学者のもとを転々としていたが、最初に英学を学んだのが千葉欽哉（繁）であった。田中は「壬申二十二歳」とあるので千葉繁の17歳年下。33歳の千葉繁が16歳の田中貫一に1～2年間、英学を教授したことになる。繁が藩校・克明館に勤めていた記録は存在しないので、個人的に田中貫一に教授したと思われる。ここから繁は、幕末の頃には浜松井上藩内で、藩士子弟に英学を教授するほど英語・英学に詳しい人物としての名声を得ていたことがわかる。

- (14) 旧平沼専蔵別邸石積擁壁、野毛坂交差点近く。
- (15) シモンズについての記載は以降、主として荒井（2004）にしたがう。
- (16) ただしシモンズが大学東校で教鞭をとったかどうかには、諸説ある。大学東校には当日、同姓のドイツ人シモンズが教鞭をとっていた。D. B. シモンズはドイツ人シモンズが来日し、交代までの「つなぎ」として仮雇用され、教鞭をとったという説と、横浜から東京までの往復はきびしく、大学東校の教師にはならなかったのではないかという説がある。
- (17) 本稿脱稿直後、佐藤孝「早矢仕有的研究（一）」が紹介する「故人交友帖」のなかに、千葉繁が早矢仕に「出資勧誘の件」を趣旨とする書簡を送付していたことが確認された（『横浜開港資料館紀要』17号、1999）。この分析は後日を期すとして、これが現存する千葉繁唯一の書簡といえそうだ。
- (18) 深瀬泰旦によると、この松山不苦庵は旧前橋藩所属である。紀州藩出身で、大学東校助教・教授を務め、のちに慶応義塾大学医学所所長、東京慈恵医科大学創設者となった松山棟庵（1839-1919）とは別人であることが中西淳朗の研究により明らかになっている（深瀬，2002, p.301）。
- (19) 千葉繁が「繁斎」と称していたというのは初見である。

引用文献

- 赤川 学，2013，『『造化機論』の千葉繁：幻の性科学者にとっての近代』『文化交流研究』No.26，pp.77-92，東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要 26。
- 荒井保男，2004，『ドクトル・シモンズ：横浜医学の源流を求めて』有隣堂。
- 千葉県教育史会，1936，『千葉県教育史』巻1，千葉県教育会。
- 千葉県史編纂審議会，1968，『千葉県史料 近代篇 明治初期一』千葉県。
- 深瀬泰旦，2002，『天然痘根絶史』思文閣出版。
- 早矢仕民治編，2003a，「早矢仕有的年譜（8）：丸善社史資料16」『学鑑』Vol.100，No. 8，34-35。
- ，2003b，「早矢仕有的年譜（11）：丸善社史資料19」『学鑑』Vol.100，No.11，36-37。
- 市原市教育委員会編，1982，『市原市史』（下巻），市原市。
- 石井良助，1981，『家と戸籍の歴史』創文社。
- 神奈川県医師会編，1977，『神奈川県医師会史』神奈川県医師会。
- 神奈川県立図書館，1969，『神奈川県史料・第5巻』神奈川県立図書館。
- 小玉順三，1997，『幕末・明治の外国人医師たち』大空社。
- 肥塚龍，1909，『横浜開港五十年史 下巻』横浜商業会議所。
- 攻玉社学園，1986，『近藤真琴資料集』攻玉社学園。
- 厚生省医務局編，1976，『医制百年史』資料編。
- 久保田要，1980，「井上家歴代墳墓」『鶴舞史談』創刊号，p.31-33。
- 栗原清一，1941，『横浜市医師会史』横浜医師会。
- 緒方富雄，1963，『緒方洪庵伝』岩波書店。
- 小幡重康編，1966，「鶴舞藩之沿革（前編）（後編）」『南総郷土文化研究会叢書5・6』南総郷土文化研究会。
- 小幡重康編，1979，「井上藩分限帳集成」『南総郷土文化研究会叢書12』南総郷土文化研究会。
- 齊藤 光，2006，『『通俗造化機論』『通俗造化機論二編』『通俗造化機論三編』解説』斎藤光編『＜性＞をめぐる言説の変遷 近代日本のセクシュアリティ1』ゆまに書房，pp. 1-13。

セメンス, 1875, 『診筵雜記』 宮崎義信 (近代デジタルライブラリー所収).

土屋重朗, 1973, 『静岡県の医史と医家伝』 戸田書店.

横浜開港資料館編, 2010, 『横浜もののはじめ考・第3版』 横浜開港資料館.

横浜開港資料館編, 2011, 『資料が語る横浜の157年』 横浜ふるさと歴史財団.

横浜郷土研究会編, 1997, 『神奈川奉行所職員録』 横浜郷土研究会.

横浜市, 1963, 『横浜市史』 第3巻上, 横浜市.

横浜市役所, 1932, 『横浜市史稿・風俗編』 横浜市役所.